

やきいもフェス 2025（異年齢交流）

取組の背景・目的

練馬区には 17 の児童館があるが、大きな専用グラウンドを持っているのは、中村児童館だけである。この広いグラウンドで、子どもたちと焼き芋ができれば楽しいだろうな、というのが企画の発端である。

かつては都内で焚火や焼き芋を目にすることがあったが、宅地化が進んだこと、条例化などにより都市部で見かけることはほぼない。以前の職場で焼き芋を行った際、「炎って熱いんだね」とつぶやいた子の一言が今でも忘れられない。百聞は一見にしかず、ぜひ中村地域に住む幅広い年代の子どもたちにも「焚火で焼き芋」を体験してほしいとやきいもフェスを実施した。

取組の概要

場所：中村児童館グラウンド

日時：令和 7 年 11 月、12 月、令和 8 年 1 月の最終水曜日。15：30～17:00。

対象：0～18 歳、未就学児の保護者

やきいもフェスは全 3 回。11 月ベニハルカ、12 月ベニアズマ、1 月シルクスウィートと 3 品種を用意した。また、近隣の洗濯物が取り込まれることを見込んで、開催時間は午後 3 時半からとした。

まずは事前準備である。火を扱うので、所轄の消防署へ揚煙行為の届出、区役所の環境課へ事前連絡が必要である。次に近隣住民の理解を得るため、事前にイベントのお知らせを約 100 戸に配布した。そして薪の調達である。

当館の子どもネットワーク会議のメンバーに焼き芋の話をするとうしまえんの伐採木の桜が手に入るかもしれない」と提案をいただく。お願いしたところ、地域の工務店の方が伐採したての桑の枝を提供してくださった。

含水率の高い薪は煙が出るので、残念だが来年度使用することにした。今回の薪は不要になった材木などを利用した。

当日は参加者がサツマイモに新聞紙、アルミホイルを巻きつけ下準備を行う。さらにマッチで焚き付け（牛乳パックを細長く切ったもの）に火をつける着火体験も行った。はじめてマッチを擦る子もいたが、職員がそばで擦り方を教えた。おっかなびっくりではあったが、実際に火が付くと「おお！」と喜ぶ子もいた。



芋が焼きあがるまで 30～40 分ほどかかる。その間、焼きマシュマロ体験のため、防災用クラッカーとマシュマロを配布した。割りばしでマシュマロを挟み、焚火で炙り、クラッカーでサンドして、おいしそうに食べていた。中には真っ黒に焦がしてしまう子、焚火にマシュマロを落としてしまう子もいたが、何事も経験である。

焼き芋は千枚通しで火のとおり具合を確認し、出来上がった焼き芋をグラウンドで食べた。「熱い！でも美味しい～」と喜びの声があちこちから聞こえた。

工夫点・留意点

イベントを重ねる中で、以下の工夫を行った。

○定員の増加（当初 35 名 → 最終回は 62 名）

当初、定員を超えた時は抽選をしていたが、希望者が増えてきたので、定員を増やした。最終回は希望者全員が参加できた。

○サツマイモの調整（当初一人 1 本 → 最終回は一人 1/2 本）

サツマイモは仕入れの都合で、やや大きめ（M サイズ）となった。低学年の子どもたちは食べきれず、残してしまうことがあったので、最終回は半分のサイズにカットした。

○調理時間の短縮（あらかじめ職員が熾火を作っておく）

焼き芋は低温でじっくり火を通すことで甘みが増す。しかし、学童クラブ児童の帰宅時間に合わせると、のんびり焼いているわけにもいかない。あらかじめ職員が焚火を熾火（炎が出ない状態）にしておくことで、芋の焼き過ぎ（炭化）を防ぎ、美味しい焼き芋を仕上げることができた。



取組の効果

対象を 0 歳からとしたことで、多くの乳幼児親子の参加があった。「お芋がおいしくて、この子がほとんど食べてしまいました」「楽しかったです」と肯定的な感想が数多く聞かれた。

小学生では 3 回連続で参加した子が複数いたので初参加の子に芋の包み方などを教えてもらった。回数をこなすことで、マッチの擦り方が上手になっていた。

屋外で焚火を囲み、協力しながら芋を焼く過程で、年代の垣根を超えた交流が多く見られた。



課題・今後の展開

焼き芋フェスの参加者数は、のべ 138 名であった。多くの利用者に喜んでもらい、異年齢交流という面では大成功であったが、近隣にお住まいの方から 1 件ご意見をいただいた。内容は「洗濯物に煙の臭いが付く」というものであった。

住宅地の中の児童館であるため、煙には十分配慮していたが、反省である。よく乾燥した薪を使うこと、焚火の時間をより短くすること、煙の出にくい装置の導入などを検討し、中村児童館の冬の恒例行事としたい。